小さな蜜柑の木

お母さん、また今年もうちの小さな蜜柑の木にアゲハが卵を産みに来たよ。尊い命の神秘がこんなに身近に感じられることを幼い私に教えてくれたのはお母さんでしたね。

あなたが私のいるところから旅立ってからは、自分本位な考えだけで生きていた当時の自分を悔やむこともしばしばです。

「お母さん、今までごめんね」と言ったとしたら、何事もなかったように静かに笑ってくれるかな。

あなたが働いていたせいで、生まれて半年の頃から保育園に通い、そのあともおばあちゃんに預けられていたのを子ども心に不満に感じていたこと。

小学生だった私の授業参観に時々訪れていたあなたを同級生の若くてきれいなお母さんと比べて恥ずかしく感じていたこと。

中学生になった私はあなたが希望する高校へ進学するために塾へ通い、嫌々ながらに勉強していたこと。

ほどなく癌を患い、余命宣告を受けて入院していたあなたを足繁く見舞うこともせず寂しい思いをさせてしまっていた高校生の私。

あなたより長い人生を送っている今の私には、あなたの行動すべてが私、そして父へ注がれる愛情そのものだったとわかればわかるほど、それが身に刺さり心が震えます。

お母さん、今ならわかる。本当は私と毎日公園で砂遊びしたかったよね。でも現実は病弱な父を支えるために懸命に働いていたこと。

お母さん、今ならわかる。父のことも支えながら、高齢で授かった私を産む決断をしたこと。そのせいで同級生のお母さんより当時では相当に年上なこと。父から聞きました。

お母さん、今ならわかる。一人っ子特有ののんびり屋な私に最善と思える高校へ進学させたかったこと。おかげで友だちにも恵まれ有意義に感じられた高校生活でした。

お母さん、今ならわかる。限られた時間を娘の私と少しでも長く過ごしたいと思っていたあなたの気持ちに気づけなかったこと。

お母さん、あなたとのお別れの日を今でも忘れられないでいます。父と病室に入った時、意識が途切れていく中、あなたは今までの全てに感謝するかのように「ありがとうございます」の言葉を繰り返し、繰り返し言っていましたね。

お母さん、今度は私が言う番です。そして「故郷の大きな蜜柑の木のように強くて慈愛に溢れた母はいつまでも私の誇りです」と。